

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第7号

新型コロナウイルス感染 特集号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2020年6月 第7号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記→

QRコードをご覧ください。

新型コロナウイルスなどの感染症に負けへんで！

引き続き予防対策、がんばりましょう！！



この時代に立ち会って

～ 新型コロナウイルス感染拡大から思うこと ～

2019年12月、中国武漢で明らかになった「新型コロナウイルス感染」は、驚くべき速さでこの地球を飲み込んでいる。あまりにも多くの尊い命が奪われ、世界は壁を作り、断絶を余儀なくされている。それでも感染のスピードは人間の想像を越えて拡大している。未知なもの、見えないものへの恐怖は人間を内へ内へと閉じ込め、人間の壁は世界の壁となり、差別や偏見を増長している。

世界中が心をひとつにして戦ってもいつ終息できるかわからないのに、誰かのせいにして犯人捜し…「コロナ鬱、コロナトラウマ」肉体のみならず心まで傷み病む。自粛が緩むとどうなるのか…と。こんな文章を書いている私自身もかなり神経が過敏になっていると自覚する。

そんな中で嬉しいエピソードを紹介したい。緊急事態宣言後、近隣の卒園児のお父さんからの電話。「先生、保育園やってる？会社にマスクがあって充分足りるから持って行こうかと思って！」マスクはだれにとっても貴重な時。もちろん感謝していただいた。その日早速、マスクの箱に「〇〇(卒園児保護者名)マスク到着！コロナは社会や人を切り離しますが、地域は人の繋がりの価値と温かさを教えてください。

今日も一日健康に感謝して！おひとり2枚ど

うぞ。」とメッセージを添えた。その後も子ども用のマスクや家のマスクのお裾分けが続いている。

いつか新型コロナウイルス感染が収束（終息）した時に世界中に「優しさ」「温かさ」が蔓延することをこの時代に立ち会った一人として強く願う。

4月の美しいスーパームーンを見上げながら、いつもと変わらない宇宙に救われた。

最後にステイホームでいつもより余裕のある時間を過ごしながらあるテレビ番組を通して心に留まった素敵な詩を皆さんにお裾分けしたいと思う。

『うばい合えば足らぬ わけ合えばあまる
うばい合えばあらい わけ合えばやすらぎ
うばい合えば憎しみ わけ合えばよろこび
うばい合えば不満 わけ合えば感謝 うばい
合えば戦争 わけ合えば平和 うばい合えば
地獄 わけ合えば極楽』 詩：相田みつを

次世代を生きる子どもたちに「苦しいことがあってもみんなで力を合わせれば乗り越えられるよ！」と伝えたい。

大阪市地域福祉施設協議会

副会長 金 恵栄

「正解のない中で最善を」

都島児童館 上加世田 直哉

子どもと関わる際に「保育に正解はない」という言葉をよく耳にするかと思います。日々、子どもたちの最善の利益とはなにか？を考え、正解ではなくとも適切なかかわりを追及する中で、3月から突然始まった新型コロナウイルス感染症による全国一斉休校。こまめな手指消毒に1時間おきの換気、できるだけ向かい合わない、お友だちとは2mの間隔をあける…。どれだけの対策を講じて3密を避けられない中、全てが手探りの状態で子どもたちと向き合い続けてきました。

命にかかわるリスクもあるため大人がしっかりと制限をかけてあげなければならない場面があるものの、単純な制限では子どもにとってストレスや活動への興味・関心を失う形になってしまうため制限と感じさせないための工夫を凝らす必要がありました。

特に昼食時やおやつの中には全員が一同に集まるため、できるだけ向かい合わないよう全員で映画を見ながら食べたり(写真①)、晴れた日には外でご飯を食べよう心掛けました(写真②)。映画に集中して全然食べるのが進まなかったり、公園でお弁当をひっくり返したりとあまり功を奏した印象はありませんでしたが(笑)これまで当たり前に行っていた活動に対して改めてこれで大丈夫かな？と振り返るきっかけとなったように感じます。

また、休校期間中には多くの企業や団体の方々から子どもたちのために!と様々な支援をしてくださり、地域や学校との連携が子供の成長にとって不可欠なものであることを改めて感じさせられました。

いまだ完全な治療法が確立されないなか、この人類共通の脅威に対し日本ではウイルスとの共生に少しずつ向かいだしました。これまでの保育とは大きく変わっていくことに不安はありますが、あらためて「正解はない、だからこそ今できる最善を」との思いでこの困難を乗り切れるように努めていければと思っています。



写真・①



写真・②

自粛ムードの中、必要な支援を届けられたか

地域生活支援センター風の輪 田代 ゆみ

会議で、ある職員から、コロナ禍で社会全体が強い自粛ムードがある中、本当は困っていても“助けてほしい”“支援してほしい”と本人や家族が言い出せない雰囲気になっていなかったか、と問題提起があり、大いに考えさせられました。

学校や幼稚園が3月にいち早く休みになった時、デイサービスや居宅、移動等のサービスを利用して乗り切った家族もあれば、日々の対応が困難であるにもかかわらず、サービスを使えないまま、家族だけでやりくりした家もありました。ある母親が「家の中を走り回る我が子を銃で撃つ夢を見た」と話された時には、心臓が止まりそうでした。ストレスから母子共に蕁麻疹を発症したり、子どもの睡眠リズムが乱れて昼夜逆転の生活になった為、テレワークの父親と母親が夜中交代でつき合った等、いろいろあります。

また、地域には単親家庭で、きょうだい共に重度の知的障がいがある家もあります。自粛期間にきょうだいの一人の発熱が続き、母親はコロナかもと不安でいっぱいでした。受診するにしてももう一人を誰に見てもらうのか等、段取りも含めて途方に暮れていました。施設職員が医師も含めて関係機関と交渉して検査を受けることができ、結果も陰性で事なきを得ました。

今回の件で、今後も未知のウイルスとの共存を前提とした新しい生活様式の確立は避けられないと感じました。同時に、万が一自分や自分の家族が同じような状況に置かれたらどうするか、どうしてほしいかと想像力を働かせて、当事者意識を持って仕事をしなければと強く思いました。



新型コロナウイルス感染の不安の中で

愛信保育園 金 恵心

昨今 TV や SNS など「新型コロナウイルス感染症」に関するニュースの流れない日がなく、その広がり不安な日々が続いています。4月7日に「緊急事態宣言」の発令がなされ多くの業態が休業要請される中でも保育園の開設は必要とされています。

子どもたちの「笑顔」と「命」を守ること、働く一人ひとりを守っていくことに対することの難しさなど日々悩みながら奮闘しております。4月に入園された方が感染を恐れて一度も登園せずに、長期のお休みをされている方もおられます。入園式や4月、5月の行事の延期、中止などが相次いで起こり、その中で、保護者会、職員たちといっしょに「子どもたちの大切な命を守るために私たちにできること」を考えていこうと話しました。

お外から帰ってきて手洗いをしていた3歳児の子どもが「先生、ちゃんと手あらわな、コロナウイルスにかかんねんで〜」と話している姿から「小さな心の中でちゃんとわかっているんだな〜」とあらためて感じる事ができました。

保護者を始め、地域の方、職員のお父さん、教会の信徒さん、コリアタウンのキムチ屋さんたちが「マスクが不足していると思うので使ってください」とマスクを持ってきてくださったり、園児のお母さんが、アルコール消毒液を「知り合いから分けてもらって」と、保育園に届けてくださったり、たくさんの寄付をいただく中で、温かい思いやりと心遣いに感謝の気持ちで胸が熱くなりました。心の豊かさの中に“安心”が生まれてくるのだと実感しました。

愛信保育園では、新型コロナウイルス感染予防として、できるだけ園庭で遊ぶ機会を増やしたり、衛生面ではお部屋やおもちゃなど手に触れるところなどの消毒の徹底、換気の配慮など、それらに焦点を合わすことから、子どもの目線に私たちが合わせることの大切さに改めて気づくことができました。また、「コロナウイルス感染に負けない身体づくり」を子どもたちと一緒に実践しながら子どもたちの笑顔が絶えないよう努力をしていきたいと思ひます。自分自身を守ることが、人の命を守ることに繋がるのだという意識を持ち、職員と保護者の連携、ワンチームとなって乗り越えていきたいと思ひます。私たち一人ひとりの行動が、終息への道に繋がると信じています。



#コロナさん、私たち、あなたに抗議します!

特別養護老人ホームいくとく 加藤 久美

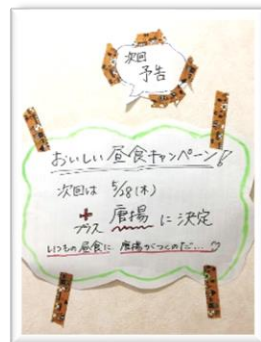
2月の初旬には考えもしなかったことがこの原稿を書きながら「えらいこっちゃ!」になっています。

5月23日ようやく緊急事態宣言が解除。面会制限をしてから、随分経過し、玄関には厳重にチェックできる体制をとり、もし、疑いや実際に感染した場合のシミュレーションをして130名の入居者、職員の命を守るということを日々行っています。でもコロナさんは一向に終息する気配は無く、緊張感は増すばかり。

今回の大地協ニュースはその惨事ではなく、人のつながりなどのエピソードということ。入居者、利用者約500名、ボランティア約60名その方々に定期的にお手紙を配布していき現状報告させてもらっています。その方々からは、応援のメッセージ、苦勞して手に入れたマスク、アルコール、手作りマスク、食料品の差し入れ等、本当にいっぱい力をいただいています。

厨房は、職員応援デーということで、食事とは別立てで、刺身3種盛りや、から揚げ、カツカレーなど作ってくれ、食べ物で力をくれています。2月の名古屋の研修で、原田先生が言っておられた「互酬性」の言葉が浮かびます。与えて受ける文化。欧米は寄付、アジアは受ける文化。日本は両方の文化を成熟させていける可能性がある。私もそう感じた今回のコロナさんです。

「行動変容」「新しい生活様式」と言われています。今回は、終息するまでに様々なことの見直し期間と思っています。皆さん、おいしいお酒を皆で呑める日まで笑ってすごしましょう。



= 大地協の皆さんへのメッセージ =

「罪の告白ができるか」

歴史上、人類が苦しめられてきた災難は、三つ。

1. 戦争

2000年の歩みで、戦争の絶えた時はなかったといわれる。私自身、小学校入学以来戦争下で育ち、20歳で敗戦を迎えた戦争っこだ。

自省すれば、何も考えず、迷わず権威に服従し志願して軍隊に入ったこと、友人の戦死は私の身代わりというべきか、と罪意識にさいなまれている。私の戦争責任と自覚している。

2. 飢餓

第二次大戦での戦死者のうち6割は餓死であったと報告されている。

岡山県日本原に演習のため10日間派遣された。民間に食べ物がなくても「国民みんなが栄養失調だった」軍隊にはあると噂されていたにもかかわらず、食料がない。高麗米(馬の飼料)と煮たニラのみ三食が10日続いた。この時に蛇を焼いて食べたのを覚えている。

生涯で一度だけ体験した飢餓感は身に滲みている。

3. 疫病

軍隊でもチブス、コレラが拡がり、私も疑いで3日入院を経験した。軍舎は不衛生というより不潔だった。

現在、コロナウイルスで地域の人々の行動は制限され、世界で400万の人々が感染している実情をどう認識するか。

セツルメントは、知識階級の下層階級への罪の告白から出発した。

地域福祉で働く者は、病魔に対する恐れ、社会的不安「家族、職業、友人関係、生活費等」におののく人々に自分も例外ではないと共感するとともに、ひとつ広い視野に立って、明日への希望の光を掲げることはできないものか。

世阿弥は「目前心後」といった。目は前に心は後ろにおけと。

それには、専門職(プロフェッショナル)として期待される重荷と責任に十分に応えられない罪の告白が求められる。努力しても達成感をえられない自己の弱さ、他の施設への羨望、同僚をねたむ心の貧しさ、虚脱感を罪と考える。

もうひとつは、なんのための施設か、自分は何をしなければならぬか、プロとして働く意味は何かを、断えず自分に問いかけることではあるまいか。即ち目的意識を明確にして、苦しみ、悲しみに耐え、明るい先を目指す姿勢を失ってはならないと思う。今は、上を仰いで、じっと耐える時であるに違いない。

自立と連帯の原理に根ざし、地域の新しい福祉の文化を創造する役割を果たす先端を走る者でありたい。

新しい文化をつくるメッセンジャーとして地域に召命を受けているとすれば、光栄ある任務ではないか。

阿部 志郎

